

「ちがい」を持つ人々との豊かな出会いに向けて



日時：平成31年1月27日(日) 13:30~15:00
会場：こうち男女共同参画センター「ソーレ」 大会議室

講師 ロバート キャンベル さん（東京大学名誉教授・日本文学研究者）

【プロフィール】

ニューヨーク市出身。専門は江戸・明治時代の文学、特に江戸中期から明治の漢文学、芸術、思想などに関する研究を行う。テレビで MC やニュース・コメンテーター等をつとめる一方、新聞雑誌連載、書評、ラジオ番組出演など、さまざまなメディアで活躍中。



今年のソーレまつり記念講演会では、ロバート キャンベルさんにご講演いただきました。ここでは、講演要旨をご紹介します。

日本人は非常にホスピタリティに長けているが、私が生まれ育ったアメリカ・ニューヨークのように多くの人種が集まってないことから単一的で、みんな同じ方向を向かおうという団結力や結束力が非常に固い。そういう連帯感・団結力は、ビジネスの中で、極めて高い品質の製品やさまざまな工業デザインを生み出している。けれど実は、地理的にも風土としても非常に多様で、一人一人が強い個性やこだわりを持っており、ものづくりの地域性一つ取り上げてもかなり多様な社会である。

「ちがい」を持つことは当たり前だが、日常の中ではなかなか気づけない。日本では人権や尊厳、権利という言葉が早くから習うが、それが侵された時に初めて人々の言葉の中に表れるくらいで、日常ではそんなに使われていない。しかし、その言葉に関係なく生きているかという点決してそうではない。

昨年のロンドンでの話だが、「大人の入場は子ども同伴の場合のみ認める」と書かれた緑地があり、その場所は元々働く子どもや孤児院の子どもが自由に遊べる解放区として作られた公共空間だった。また、仕事帰りの人が次々と苗物を購入していた店の看板には「私たちは、雇用、職業訓練、あるいは教育の機会を与えるために存在する団体」とあった。大事なのは一緒にいられる場所をつくることだ。

人はそれぞれ生まれ持ったものや、環境や状況によって現れる「ちがい」を持っている。それをその人の特性や能力と考え、社会の一員としてなにつくり出せるかを引き出そうとしていることがいい。近年、日本も障害者に対し非常にフェアになり、十数年前まで障害者は一様に考えられていたが、それぞれの身体的あるいは発達の状況を見分け、個々の可能性にまで視線を向けるようになってきたことが大変嬉しい。

このことがこれから日本が多元性や多様性について、また「ちがい」を持つ人々に対してどのように基

本的に向き合っていくのか、ということに対する一つの大きな試金石だと思っている。

ここ5年位に行われた調査によると、約 11%のセクシャルマイノリティの当事者がいると言われている。血液型AB型の人が大体 10%位と言われており、それと同じぐらいだ。3年前にNHKが行なった「あなたの周りにLGBTの方がいるかいないか」という調査では、73%の人が「いない」と回答した。いわゆる日本人の四大名字、佐藤、田中、鈴木、高橋さんの割合は人口の5%程度にもかかわらず、殆どの人が周りに「いる」として知っている。しかし、その四つの名字より多いことがほぼ間違いないLGBTの人たちを大多数の人たちは知らない。それは「いない」のではなく「ここにいるよ」と言えずにいる、あるいは言わずにいることを物語っている。

世界中で今、人々がそれぞれのポテンシャルや、本来の生産性をどう発揮できるかということが考えられている。日本もどう議論し意見をつくるかがとても重要だ。しかし「いない」では話にならない。「いる」ことから、その「いる」人たちの不具合、不利益を一つ一つ取り除いていくところから始めないといけない。

私の母語は英語であるが、19歳頃に日本語と出会い勉強して習得し、その中で自分の人格や人間関係、そして家族をつくった。母語と聞くと、自分のアイデンティティにつながっていると思いがちだが、言葉が変わると自分も変化をする。しかし、セクシュアリティというのは学習をしたり手放したりするものではない。より一層本質的な芯のような資質だ。

それぞれみんな「ちがいを」持って当たり前。それを一人一人がどう識別し、折り合っていくか。しんどくもあるが、とても楽しいことでもある。そのことが、豊かな面白い明日を私たちにもたらしてくれることを信じていたい。

